大阪市立大学附属図書館医学部分館の新築について

Completion of a New Library : Medical Library, Osaka City University

光 斎 重 治*

大阪市立大学附属図書館医学部分館

I. は じ め に

永年待望されていた大阪市立大学附属図書館医学部分館の新館（大阪市立大学医学部基礎学舎増築棟）は昭和 59 年 1 月 31 日に竣工し、2 度にわたる移転の後、同年 4 月 28 日から実質上の供用を開始した。竣工式は併設の「放射性同位元素実験施設」（以下 RI〔新棟の地階と、1 階の玄関を除く部分〕）の機器の整備が遅れたため、同年 8 月 9 日に举行され、これによって新館は名実共に開館し、新しい歴史を歩みはじめた。

新館は全国の医科大学または医学部の図書館と比較すれば、まだまだ小さく、ささやかな方ではあるが、それでも旧館の跡地の一部を転用して設置した保存書庫をも合わせると、図書館全体として約 1,700 m²の面積となり、日本医学図書館協会加盟の医学図書館のほぼ平均的な広さを確保することができることになって、新館における設備・機能の充実とともに、関係者一同の喜びとするところである。

以下、編集者の求めにより、簡単な報告を試みたい。

II. 新館ができるまでの経緯

この新館は、大阪市立大学医学部の前身である大阪市立医学専門学校が、昭和 19 年 4 月に設立された際、その認可条件として「図書館は別棟として建設する様計画し、図書購入費を増額して研究及び勉学に資すること」¹⁾とされて以来、実に 40 年ぶりに実現されたも

のである。

その間、当初の計画は戦争の激化および敗戦とともに実現せず、医専の附属病院となった市民病院の一隅に、その後市立医科大学、更に市立大学医学部となって、創立時市内の商業学校に間借りしていた基礎学舎が、附属病院のある阿倍野地区に建設された後も、学舎内の一部を、また学舎の増築とともに 2 度 3 度と移転し、その都度若干の面積の増加をみつつも、基本的には基礎学舎または病院の一部に、1 室から数室をもって閲覧室、書庫、事務室を構成するという、極めて小規模な図書館施設であった。

医学部基礎学舎の建設も、北館にはじまり、西館、南館と一応完成し、附属病院も、市民病院であった本館から、北館、東館と 900 床を超える大病院に成長する中で、図書館新築の計画も何度かなされたようであったが、高度成長経済の終焉、それにともなう大阪市政の悪化とともに、その都度予算化が見送られ、実現することはなかった。

一時期、文部省が公立大学に対する助成の一部として、図書館新築についても補助金を出すという話があり、この補助金を受けて新築したという公立医科大学の話も伝わり、毎年助成金を申請するということを繰り返しかえていたが、やがてこの助成金も打ち切りとなり、振り出しにもどることになった。

この間、乏しい予算とはいえ、毎年購入される図書館資料で書庫は満杯状態となり、昭和 55 年度末の計算では、書架の未収蔵部分の総延長が、150 m を切る状態となり、平均増加冊数で除した余命が 1 年 6 ヶ月を割るという事態に立ち至った。

もともと当館は、図書館資料の教室・医局等への分

* Shigeharu KOSAI : Medical Library, Osaka City University.
Asahi-machi 1-4-54 Abeno-ku, Osaka 545, Japan.
(昭和 59 年 11 月 5 日 受理)

置は原則として認めておらず、大学の費用で購入された資料は一切図書館で保管運用するという建前を10数年以前から実施しており、その為にも、資料のスムーズな運用のためのスペースの確保は絶対であった。

そこで昭和57年度には、学部内外に向けて猛烈なキャンペーンを開始し、協会の統計資料等をもフルに活用して、書庫の狭隘、設備の貧弱さを刷り物にしてアピールすると共に、各方面の会議、委員会等へも分館長を通じて訴え続けた。

幸い医学部当局の認識が高まり、大学の予算を検討する予算建設委員会等においても、学部選出委員の活躍が効を奏し、大学の学舎充実第3次5ヶ年計画の初年度分として、昭和57・58年度の両年度にわたって、総額5億5千万円の建設予算が計上されることになった。

しかし、この予算は、医学部が図書館施設と同様に建設を切望していた「R I」との共同施設としての建物を建設するために計上されたもので、全額が図書館の建設のために充てられたものではなかった。このため、永年の念願であった図書館としての独立建物の構想は放棄せざるを得ず、木に竹を継いだような施設となるおそれはあったが、背に腹はかえられず、この計画に従うことになった。

場所は、かねてから図書館の建設地として予定していた基礎学舎前庭が充てられることになり、市街地のこととて、それでなくても緑が少ない学舎の植込みをつぶすということで、若干心苦しいところはあったが、他に代替地としては中庭のテニスコートをつぶすことぐらいしかなく、これとて教職員・学生の唯一のレクリエーション施設なので、結局当初の前庭に落ち着き、昭和58年3月10日に起工ということになった。

III. 基本構想

さきに述べたように、建物が諸般の事情から、目的も機能も全く異った「R I」との複合施設であることが運命づけられた瞬間から、図書館独自で、建物としての基本的な各室・各施設のレイアウト、動線の設定等を検討することは困難になった。

したがって、まず両施設の境界、出入口、階段、エレベーター等建物としての基本的な施設の位置から、両者が話し合って決めていかなければならなくなった。

そこで図書館としては、R I実験施設といった、いわば危険物を取り扱う施設と、図書館のような不特定多数が自由に出入りする施設とが、同じ玄関出入口を共用することは極めて不自然であると判断し、本来地下と1階はR I、2～4階は図書館と割り振られていた区分を、少なくとも正面玄関については図書館専用の出入口とし、R Iについては基礎学舎からの渡り廊下から出入りするものの原則を確立してもらった。

新館建設に際しての基本的な構想としては、建物として最少限上記の原則を確認した上、図書館としては予算、敷地、複合施設等の関係から、どうしても小規模なものとならざるを得ないので、いろんな機能を盛り沢山に盛り込むことはさけ、次の諸点を基本とすることにした。

- (1) 少人数による管理・運営がはからなければならないため、全館開架式とし、チェックポイントを1ヶ所にすること。
- (2) 従来3ヶ所にわかれていた雑誌収蔵書庫を、少なくとも最近のものは1ヶ所に集中できるようにすること。
- (3) そのため、書庫を積層とし、空間の有効利用をはかること。
- (4) 全館空調とし、全室にカーペットを敷くこと。
- (5) 専用エレベーターを設置し、人員と共に資料輸送の便をはかること。また、身体障害者の利用に備えその便をはかること。
- (6) 情報メディアの多様化に対処するため、視聴覚室を設け、事務室からのリモート・コントロールが可能なように、配線・配管しておくこと。
- (7) 研究者の落ち着いた研究・読書環境を確保するため、研究個室を設けること。
- (8) 学生の学習のため、開架閲覧室の座席を増し、個室を設けること。

以上を基本的な考えとし、少なくとも10年間は増築

または大規模な移動を行わなくても済むよう、既存設備の一部を保存書庫として残し、連絡に新館との間に渡り廊下を設置することにした。

予算の関係から、1階分をけずられた書庫を、積層構造にすることで、実質的には当初の収容量を確保することが可能になるが、計算的には、あと15年程しかもたず、その頃完成が見込まれている病院本館の建替と、その中に設置が検討されている「情報センター」構想に後事を託することにした。

IV. 建物の概要

1. 位置

医学部構内の門をはいったすぐのところにある。基礎学舎西館とは渡り廊下でつながり、病院からは一般道を通らなければならないが、至近距離にあって比較的好位置を占めている。

2. 建築と設備・機能

新棟の図書館部分の総面積は 990.05 m² で、これに積層書庫の2層部分の面積(274.5 m²)を加えると、図書館が使用する新館の延床面積は 1,265 m² となる。

図1. 1階平面図
(斜線はRI部分)

図2. 2階平面図

- A. 雑誌架 和洋新着雑誌約 1,000 タイトル収納
- B. 閲覧個席 1人用キャレル8脚 8席
- C. 閲覧机 4人掛 4脚 16席
- D. サービスカウンター

1階は約 27.5 m²の玄関ホールのみで、すぐ階段で2階へ上がることになっている。エレベーターもついているが、チェックポイントを2階にした関係から、エレベーターはキーロックして1階へは降さず、1階からの利用は、身体障害者および荷物の搬入に限ることにした。車椅子等による利用者は、エレベーター横にあるインタホンで事務室へ連絡し、係員がエレベーターを操作して1階に降すことになっている。

1階玄関ホール正面には、新館建設時の医学部長であった増井教授が選ばれた言葉「*Scientia pro bono humani generis*」(科学は人類の福祉のために)が壁面を飾っている。

階段で2階へ上がると、基礎学舎西館から渡り廊下を通ってくる動線と2階ホールで出会い、ここからチェックポイントを通して閲覧室にはいることになるわけだが、将来はここにBDSを設置して、名実ともに本来のチェックポイントの働きをさせるつもりでいる。しかし、現在のこのポイントはサービスカウンターから目がとどく位置にあるというにすぎない。

図3. 雑誌・二次資料閲覧室

2階は主として研究者のための、新着雑誌の閲覧と、二次資料の検索のための閲覧室とした。北面・西面の窓下にとりつけた書棚に、各種二次資料を配置(最近10年分、1年毎に古いものから書庫に収容の予定)し、マニュアル検索に備えると共に、サービスカウンター背後の事務室と隣りあって情報検索室を設け、端末機やプリンターの機械音、利用者とのインタビューの話し声が閲覧室にもれないよう配慮しながら、文献検索の一元化を図ることにした。

新着雑誌は、2日間平机にランダムに展示すると

どめ、展示後はすべてビジョンホール型雑誌架に収納することにした。この際若干の展示的效果をも与えるため、せめて背文字や巻号数が読めるように、すべて横向きに収納できるよう設計した木製のビジョンホールを特注した。

このほか2階には、サービスカウンター、事務室、複写室、手洗い等を配置して、メインフロアとしての機能をもたせることにした。

3階書庫は積層にし、1層に1971年以降の洋雑誌、2層には1946年以降の和雑誌を配架することにした。

図4. 3階平面図

これは当館の利用統計による累積利用率²⁾が、洋雑誌の場合10年の保有で利用の90%をカバーできる値を示していることから、ふみきったものである。

このように、新館の書庫にはすべて雑誌を収納することにしたため、書架に側板をとりつけ、それにフレームをつけて、そこにその書架に配架してある雑誌の誌名をすべて掲示することにした。また、書架には全部番号を与え、その番号板を1層と2層で、即ち洋雑誌と和雑誌で色別けして、書架でも洋雑誌と和雑誌の配架をわかりやすくするようにした。

また、書庫内の窓下一面に60 cm幅の板をはりめぐらし、適当な数のキャスター付丸椅子を配置して、キャ

レルとして利用できるようにすると共に、複写のために、カードおよびコインによるセルフサービスの複写機を置いて、利用者の便をはかることにした。

ちなみに、キャレルで閲覧した雑誌は、今のところ利用者が自分でもとの位置にもどすことにしているが、複写したものは、複写機横に返却台としてブックトラックを配置し、そこに置かせて、統計処理後係員が書架に収納することにしている。現在のところ、書庫内閲覧の状況が十分つかみきれていないので何とも言えないが、返却に際しての書架上の乱れもなく、閲覧数も少ないようなので、統計処理的にも誤差の範囲内ではないかと思っている。しかし、将来書庫環境がよくなり（現在はエアコンなし）閲覧利用が増加すると、閲覧後はキャレルに本を置いたままにさせ、係員が統計・収納等の処理をする方法を考えなければならないかも知れない。

図 6. 書庫一層の通路

図 5. 書庫内キャレル

今ひとつ、新書庫におけるサービスとして、書庫内に小型のブックトラック(M社製 W60 D35 H75 cm)を数台配置して、利用者が自由に使えるようにしたところ、大変好評で、重い雑誌の移動(複写・貸出・手続)等によく使われている。とりわけ、教室秘書諸嬢の労働条件の緩和に貢献しているのではないかと考えている。

4階は主として学生閲覧室とし、中央に3列、木製の天板と側板を取り付けた3段書架計23連を配置して、比較的新しい単行本を配架することにした。古くなったものは、目録だけを残し、保存書庫に収納することにして、部分開架制をとっている。

この部屋も、北面・西面の窓下に書棚を取り付け、そこにレファレンスブックと、本学関係資料(教室記念誌・業績集、同窓会関係出版物)や府医師会等地域医療関係の資料を配架し、厚生省特定疾患関係の報告書などもコーナーを設けて別置することにした。

また、この階には研究個室(5室)と、視聴覚室を設置した。視聴覚室には将来個人ブースを設置して、それぞれ個々に利用できるよう計画しているが、現在は

どの型のビデオテープでもかかるように、3台のデッキを併置した大型テレビを囲んでのセミナー等の利用と、小集会にも利用できるよう、黒板、スクリーン、暗幕ブラインドを備えた多目的室の機能をもたせている。

閲覧席は書架で仕切られた両側に、6人用机4脚と個席16席を用意し、利用者の好みによって選べるようにした。この閲覧室の椅子は、比較的長時間座っていることが予想されるので、耐久力があって疲労が少なくとされているT木工社製の木製椅子を採用した。

図7. 4階平面図

図8. 単行本開架閲覧室

3. 設備関係

旧館の各室にも、書庫を除いて、一応パッケージ型

の冷房機と、ガスストーブによる暖房はついていたが、新館には空調設備がつくことになった。

しかし、書庫については、さきに報告のあった九州大学においても大分苦勞されているようであった³⁾が、当館においても依然として大学および大阪市の建築関係者の理解が得られず、また他部局に対するバランス上の問題もあって、冷暖房とも実施することはできなかった。

書庫の消防設備については、当初は、本にとっては火もさることながら、水もまたこわいということで、出火時には書庫を密閉して、ハロンガスによる消火を考えた事もあったが、不特定多数が出入するオープンシステムの書庫では、出火による被害よりも、逃げおくれたものの窒息による人身事故の方が危険であると判断して、原始的な消火栓を設置するにとどめた。

照明は、閲覧室関係では窓を大きくとり、できるだけ自然光を採り入れられるようにし、窓際の照明は昼間は消せるよう配線して、消エネ化をはかった。したがって、大机、個席とも直接照明は考えなかった。

電話は切替自由のビジネスホンを書庫内各層に2台ずつ、2階・4階の閲覧室前エレベーターホールに各1台、その他各室・各セクションに計12台配置して、ドクターコールの際近くの電話機をすぐとれるようにすると共に、受話器に内蔵されたインタホン機能により、館内各所から事務室・複写室・サービスカウンター等へワンタッチで連絡できるようにした。ドクターコールについては、病院内においても若干問題視するむきもあるが、ポケットベル等による呼出しが十分普及していない本学においては、館内といえども実施せざるを得ないと判断し、館内各所にスピーカーを配置して、サービスカウンターからマイクで放送することにした。通常はこの装置を使って、時計とセットした開・閉館等のアナウンスを自動的に流すと共に、書庫のチャンネルに限りBGMを流している。

エレベーターは、4階位の建物であるから(構造的には地階のR Iにも降すことができるようになっていいる)、人員輸送というよりは、図書や物品の輸送と、身体障害者の入館に備えて設置してもらった。もちろん一般乗用に使用しているが、防災上の建築規準の関

係から、エレベーター・階段ホールは、防火扉で仕切られた場所に設置しなければならず、当初予定していた動線に基づいた資料管理の方法と若干矛盾する点がでてきたため、前述のように、乗用は2階からとすることにした。

また、書庫が最初予定していた2階分ではなく、1階2層となったため、技術的に2層部分にエレベーターを止めることが困難になり、図書をブックトラックで書庫2層に運ぶことができなくなった。そこでやむなく、別に2階事務室部分と、3階書庫の1層と2層とをつなぐゴムウエーターをつけることで解決することにした。

積層書架は、業界大手のNF社のものが採用されることになったが、2層部分の施工が悪く、夏季には鉄板がふくれあがって、歩くとポコポコ音が出る状態となり、一度やり直してもらったが、いまだに不安定な状態が続いており、業者選定の重要性をつくづく思い知らされたところである。

V. 反省点

さきに述べたように、新棟がR Iとの複合施設となることがきまった時から、図書館棟としてのプランやレイアウトがいろんな点で制約を受けることになった。また、官公庁建造物の常として、設計管理や工事監理はすべて建築担当部局の直接の仕事となり、予算面からも、また形式上からも現場の裁量がはいり込む余地はほとんどなかった。したがって、見取図程度の図面と、図書館の機能面についての説明・希望は十分伝えたつもりでいたが、部分的な問題については、建築担当部局で独自の判断がなされる場合が多かったと思われる。今になって思えば、そのことがやはり結果において、新館の若干のウィークな点につながっている事実是否めない。

例えば、書庫の冷暖房設備についても、「書庫は倉庫である。したがって空調はいらない」という建築当局の固定観念を打ち破ることはできなかった。いくら図書館が全館開架のオープンシステムを説明し、書庫内キャレルの重要性と、その利用効果から書庫内居住性

の重視を説いても、ついに理解が得られず、我々の非力を思い知らされる結果となった。

建物ができ上がってみて、設計当初、いろんな経験と予測から、使い勝手についても十分検討を加え、注文をつけたつもりでいたが、建物はそれ自身で独自の性格と機能をひとりでに生みだすものであり、ちょっとした段差や建具の具合によって、ブックトラックの運行がスムーズにいかないといった結果を生むこともあった。

最も頭を痛めたのは、新館の最重要部分のひとつである積層書庫の問題であった。当初我々は、選定された業者が大手のNF社であったことから、ある種の期待と信頼をもって作業の進捗状況を見まもっていた。ところが担当者のせい、か、会社の方針かはわからないが、施工に際しての我々の希望と指示がなかなか伝わらず、何度もやり直さなければならない事態が生じ、最終的にも、前述のとおり、積層床部分の鉄板の施工がうまくいかず、利用者に不快感を与える結果となっている。もちろん、このまま放置することはできないので、何回でもやり直しをさせることになるが、それにしても、その間利用に支障をきたすことになるので迷惑である。このことは、業者選定に無関係であった我々には責任が無いとはいえ、この種のことは大手と言えども決して信頼はできないという、良い教訓となった。

このほか、ああしとおけばよかった、こうしておくべきだったと思われることがいくつか出てきたが、これらは、これからの工夫と努力で何とか乗りきっていくと思っている。

VI. おわりに

永年利用者から切望され、館員も念願していた新館が、各方面のご理解とご尽力により、何とか実現した。

もとより緊縮財政下の予算事情と、大学をとりまく諸般の情勢から、国立大学や私立大学のような立派なものができるとは期待していなかった。

それにしても、学内では1学部図書館としては他に類をみないものであり、医学部教職員あがての努力

の賜物であると思っている。特に、当初予定していた大学予算では不足し、それを補う医学部独自の予算措置はまさに早天の慈雨であった。その結果が、閲覧室関係の什器類の整備として結実した。床のカーペットの色と調和したこれらの木製什器類は、落ち着いた雰囲気とソフトな感触を与え、来館者に一種のくつろぎをもたらし、研究・学習意欲をそそるものと期待している。

開館以来はや半歳を経過し、幸い利用者も旧館当時よりは増加して、概ね好評を得ているようである。我々は新しい革袋に新しい酒を盛るよう更に努力を重ねて、より充実したサービスを提供するつもりでいる。

最後に、新館建設に寄せられた大阪市当局をはじめとする関係者、および、何かと側面からご支援いた

いた日本医学図書館協会加盟館の皆さんに、心からお礼を申し上げて、この報告を終りたい。

注

- 1) 大阪市立大学百年史編集委員会編：大阪市立大学百年史 部局編, 1983. p.1232
- 2) もともと引用文献分析として発表された次の論文の調査方法を、当館の利用統計に応用したもの。
武者小路 信和：引用文献分析；経済学一戦前・戦中期「経済学論集」を対象として, Library and Information Science, 16：50-65, 1978.
- 3) 西嶋 武：九州大学附属図書館医学部分館の新築計画について, 医学図書館, 29(3)：229, 1982.

工事の概要

位 置	大阪市阿倍野区旭町1-4-54	
工 期	起工	昭和58年3月10日
	竣工	昭和59年1月31日
構 造	鉄筋コンクリート造地上4階地下1階建	
建築規模	建築面積	331.06㎡
	延 面 積	1,680.96㎡
工 事 費	455,000,000円	
基本設計	大阪市立大学事務局	
	大阪市都市整備局営繕部	
実施設計	大阪市都市整備局営繕部	
	株式会社湯浅建築設計事務所	
	株式会社新日本設備計画	
工事監理	大阪市都市整備局営繕部	
	株式会社新日本設備計画	
施 工	建築工事	田中建設株式会社
	電気工事	株式会社星屋電気商会
	給排水・空調設備工事	向井建設工業株式会社
	電話設備工事	三紀電気工業株式会社
	昇降機設備工事	日本オーチス・エレベーター株式会社
	瓦斯設備工事	大阪瓦斯株式会社